子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル：

学童期における日本語を用いた選択的聴取能力 ―選択的聴取の児童向けアセスメントツール開発―

和文タイトル：

学童期における日本語環境下の選択的聴取能力の実態把握 ―聴覚情報処理に関する児童向けアセスメントツール開発を目指して―

ユニットセンター（UC）等名：京都ユニットセンター

サブユニットセンター（SUC）名：

発表雑誌名： 日本音響学会

年： 2021　　DOI： 10.20697/jasj.77.8_500

筆頭著者名： 加藤正晴

所属 UC 名： 京都ユニットセンター

目的：

聴覚の発達過程において、騒がしい場所で聴きたい音を聞く能力である選択的聴取能力の発達時期は遅いことが海外の研究で報告されている。しかし選択的聴取課題では音声言語を刺激として使うため、海外の結果が国内でもあてはまるとは限らない。本研究では エコチル調査参加者に対して検査を行い実態を把握した。

方法：

木津川サブユニットセンター参加者のうち小学 2 年生 96 人を対象とした。2 種類の選択的聴取課題、(1)図と地課題、(2)競合語課題の検査を実施した。参加者はヘッドホンを被り音声刺激が何と聞こえたかを口頭で回答した。(1)では雑音存在下で音声刺激が呈示され、参加者はそれについて回答した。(2)では両耳に異なる音声刺激が呈示され、参加者はその両方について回答した。

結果：

成人に対して同様の方法で検査を行った我々の先行研究で得られた結果と、今回の学童期の参加者の結果を比較したところ、課題(1)、(2)ともに学童期の参加者の成績は成人の参加者の成績よりも有意に低かった。学童期の参加者の成績が成人の参加者の成績よりも低い結果は、海外の結果とも一致するものであった。同時に、学童期の参加者間の成績は個人差が大きかった。

考察（研究の限界を含める）：

図と地課題と競合語課題はどちらも選択的聴取に関わる課題であるにも拘らず、参加者によって成績はまちまちであった。ばらつきが出るのは 2 つの課題が選択的聴取の異なる側面を調べる課題であることを示しており、選択的聴取能力を測るためには少なくとも 1 つの課題だけでは十分に測定したとは言えない。標準化のためにこの 2 種類の課題を使うことは理にかなっているが、この 2 つの課題だけで選択的聴取能力の全てを計測するに十分かどうかはわからない。今後更に幅広い年齢でデータを収集し、選択的聴取能力の発達検査の標準化を目指す。標準化を行うことで聴覚情報処理障害の早期発見や子どもの音環境の改善へ繋がることが期待される。

結論：

同じ方法で検査された成人の参加者の成績と比べて学童期の参加者の成績は有意に低かった。このことは選択的聴取能力の発達は国内においても海外と同様、発達がゆっくりであることを示唆する。